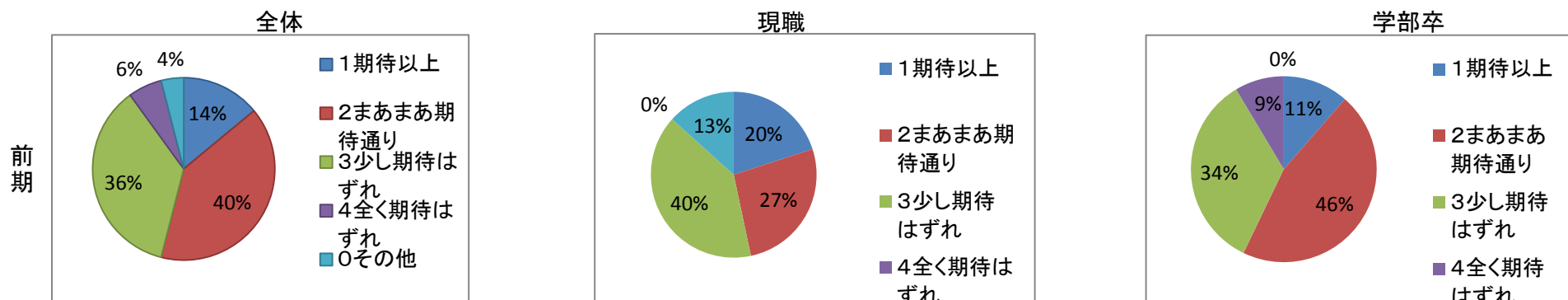
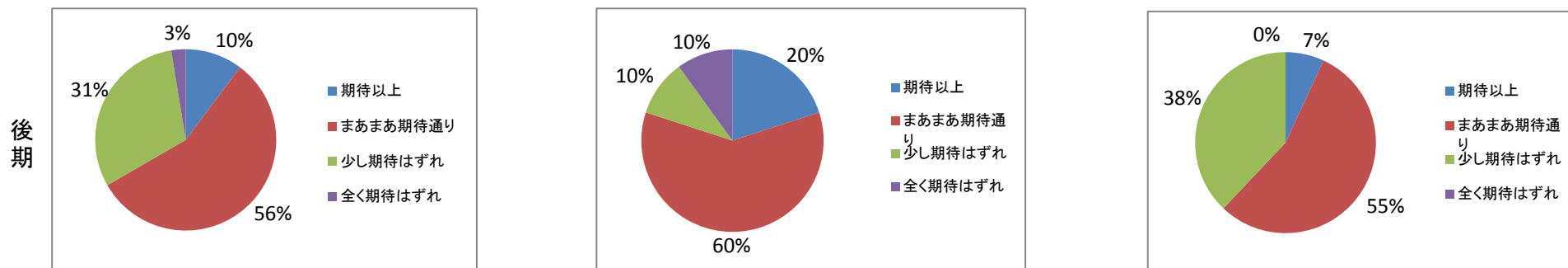


Q1 授業内容は、入学する前に期待していた通りでしたか。



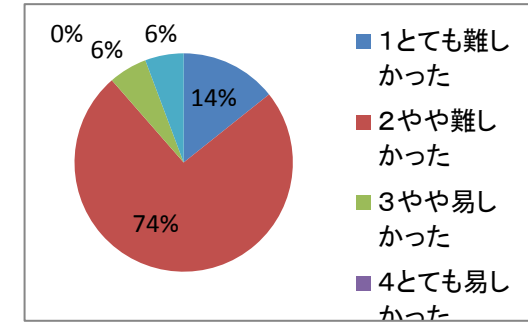
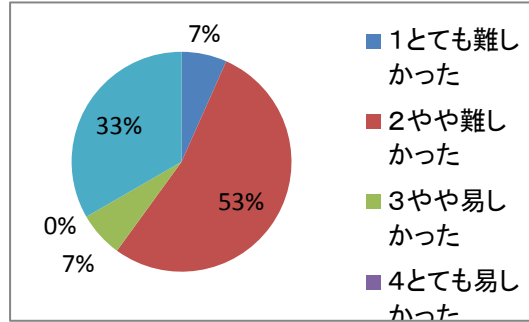
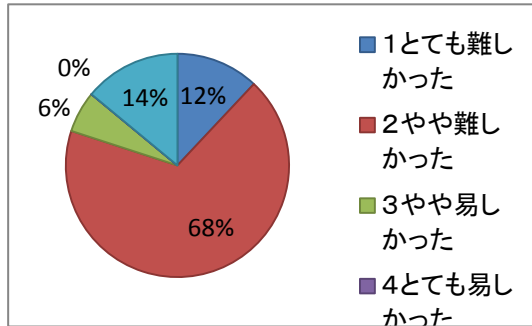
「期待以上」「まあまあ期待通り」を合わせてみると現職47%の満足度に対し、ストレートマスターは57%の満足度で、期待していた通りかに関しては現職にやや厳しいものとなっています。現職に満足度が低い理由としてはほとんどの科目でストレートマスターとの混合による授業が編成されていたり、理論と実践の融合を目指す授業が狙いであるはずであるが実践の方にやや重きが置かれていることなどが考えられます。



前期に比べて全体に「期待以上」「まあまあ期待通り」とする院生の割合が54%から66%へと増えており、満足度が上がったことが窺えます。

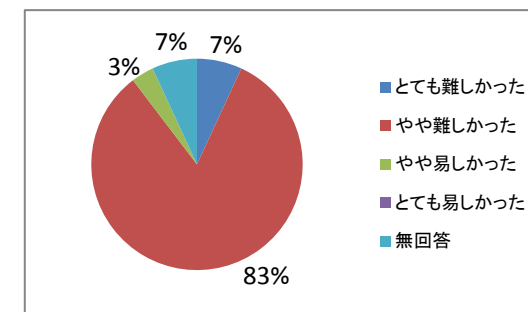
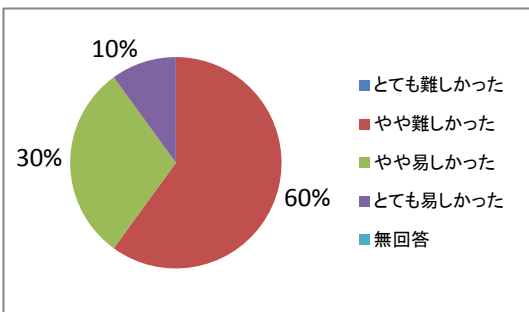
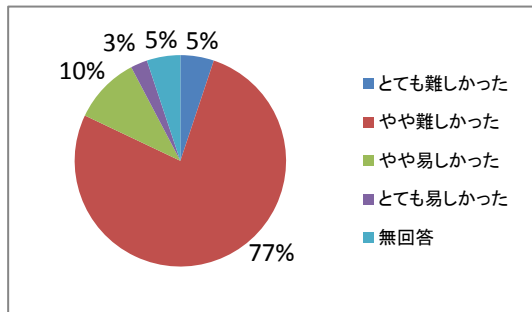
Q2. 全体として授業のレベルはあなたにとってどうでしたか。

前期



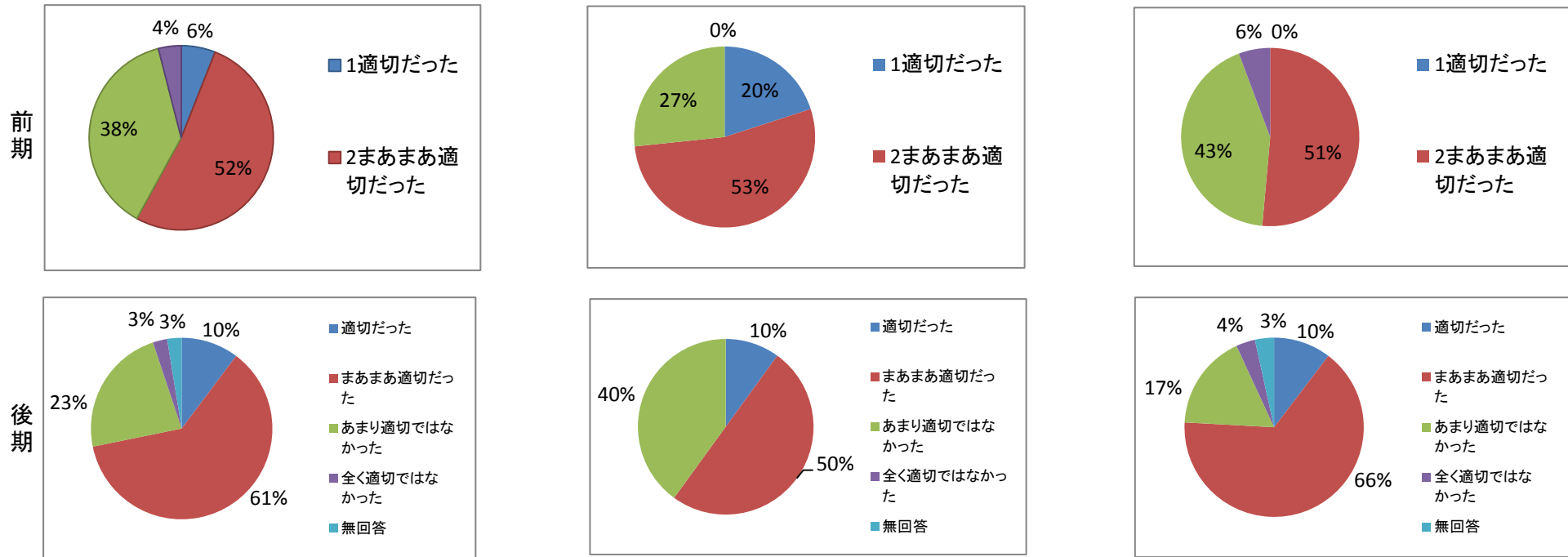
授業のレベルは、全体にとっても難しい(12%)、あるいはやや難しい(68%)ものとなっているようですが、特にストレートマスターにとっては難しいものとなっています。学校経営等、分野や内容によっては、特にストレートマスターにはなじみが薄いため、ガイダンス的な時間を設けたり、参考文献を紹介する等の工夫が必要なのではないかと思われます。

後期



全体に難しかったとする院生の割合は大きく変わりませんが、現職者に関しては「やや易しかった」とする者の割合が前期6%から後期30%へと増えています。

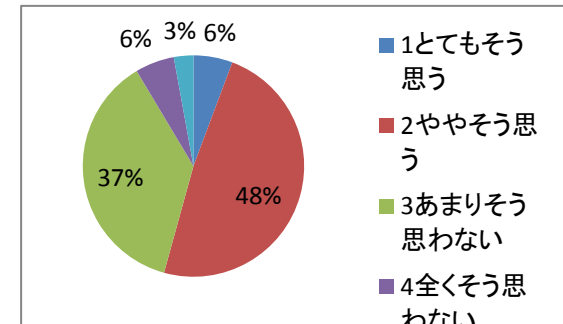
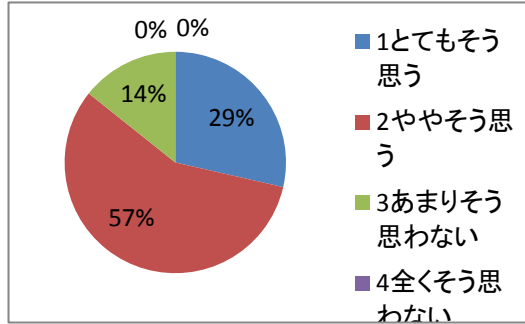
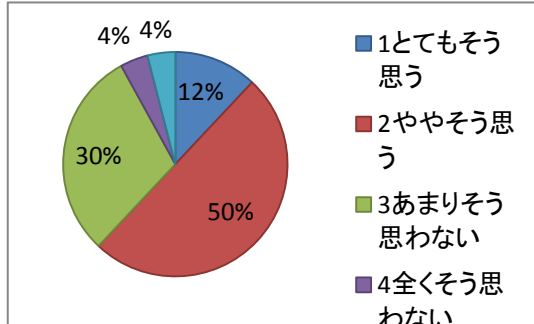
Q3. 大学院側が用意した時間割の編成は適切でしたか。



ストレートマスターでは前期より「適切だった」「まあまあ適切だった」と答えた割合が51%から76%に増えたのに対し、現職者では73%から60%に減っています。現職者には勤務している方多く、7限目の講義の不足などがこうした厳しい評価につながっていると考えられます。

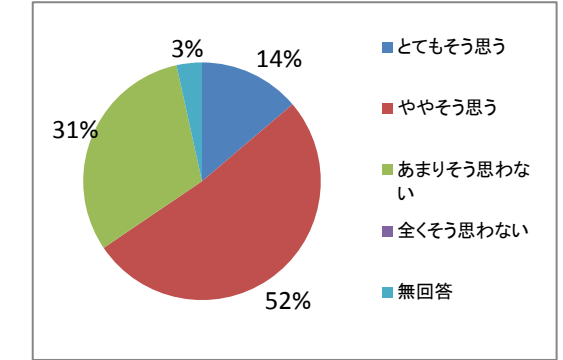
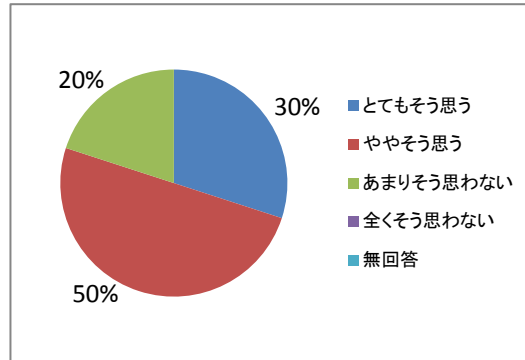
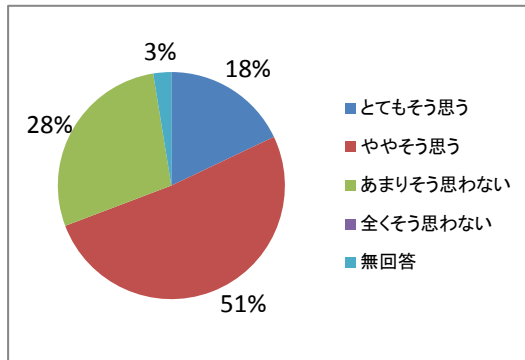
Q5教育課程は、新しい学校づくりの有力な一員となりうる新人教員の養成並びにスクールリーダーの養成を果たすのにふさわしいものとなっていますか。

前期

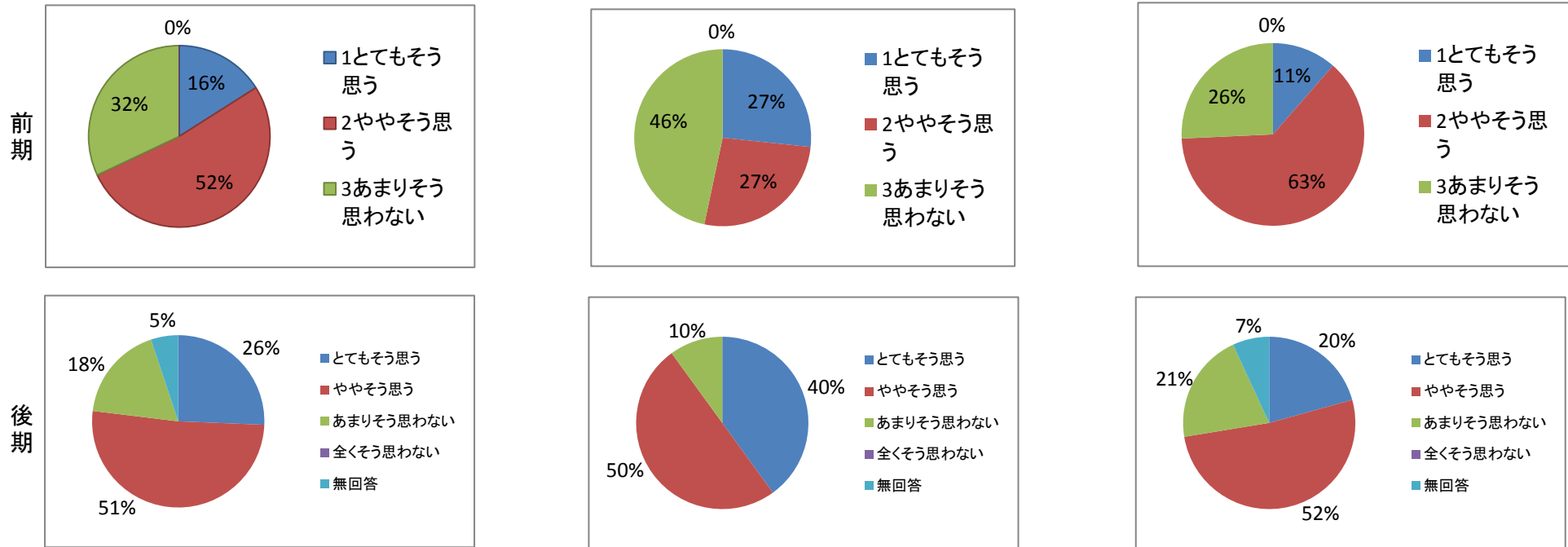


新人教員並びにスクールリーダー養成の観点から見たカリキュラムのふさわしさについては、ストレートマスターについてやや厳しい回答になっています。どのような点でカリキュラムに不満を抱いているのか、説明の必要があります。

後期



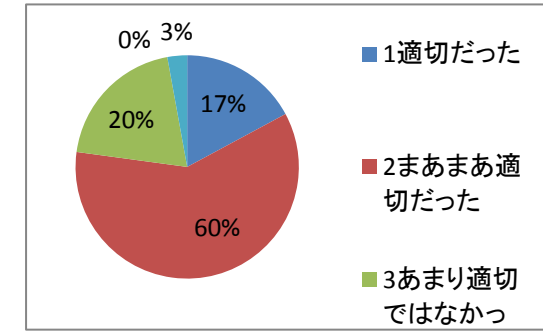
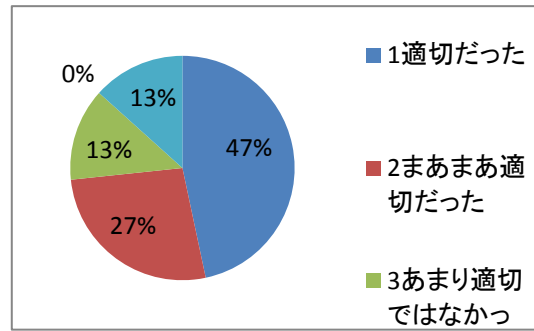
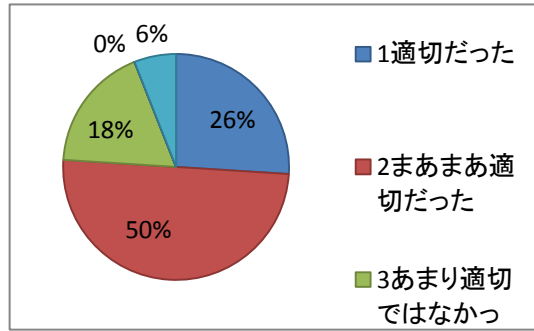
Q6. 教育内容は、教育現場における課題を積極的に取り上げ、その課題について検討を行うようになっていますか。



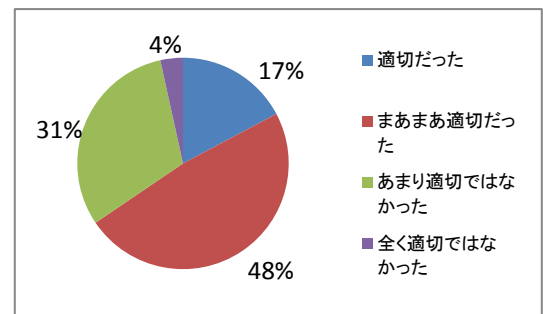
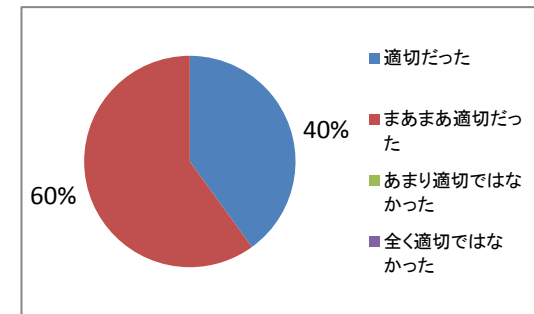
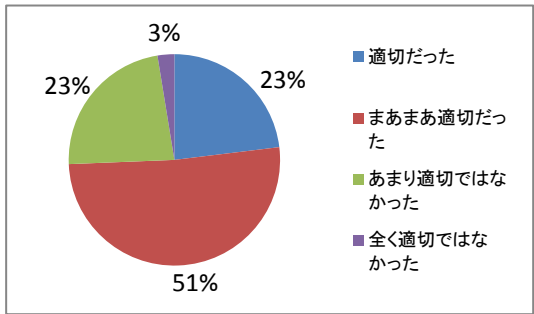
「とてもそう思う」「ややそう思う」は前期と変化はないものの、現職者の評価が特に増しています。

Q7. 履修指導は適切でしたか。

前期

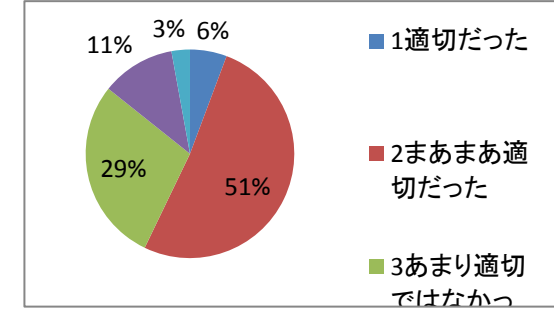
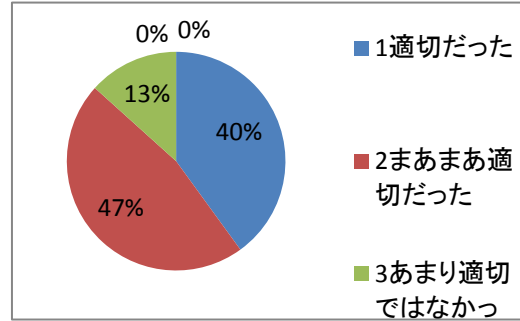
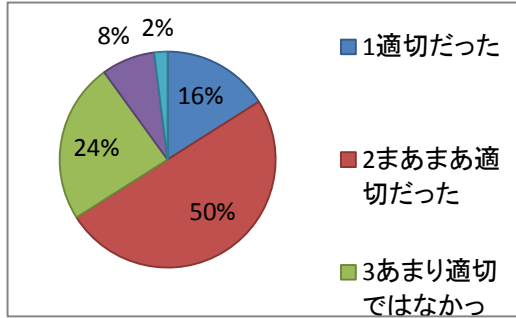


後期

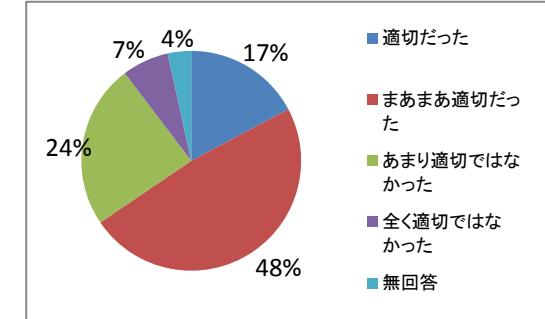
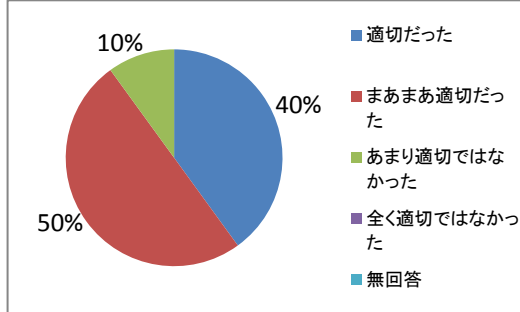
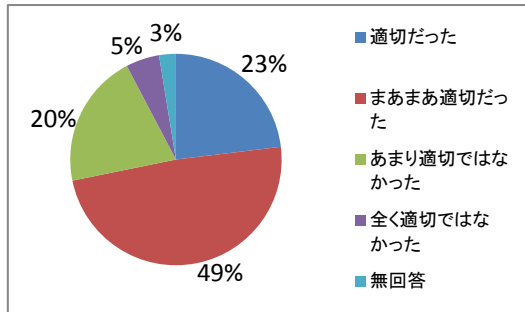


Q8. 事務局から院生への連絡は、適切でしたか。

前期

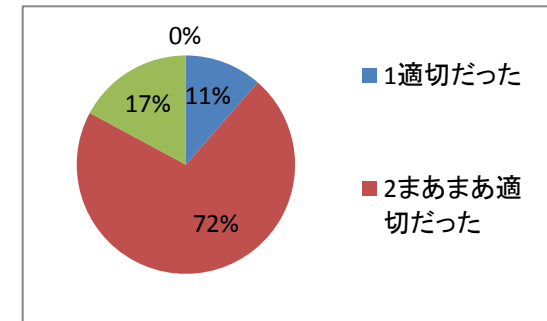
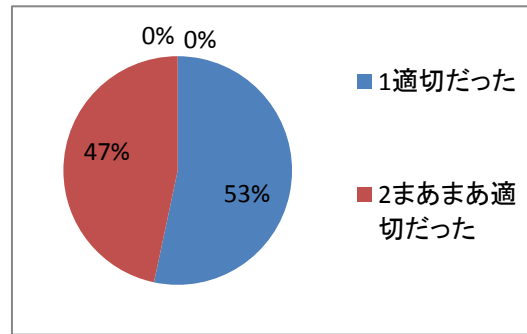
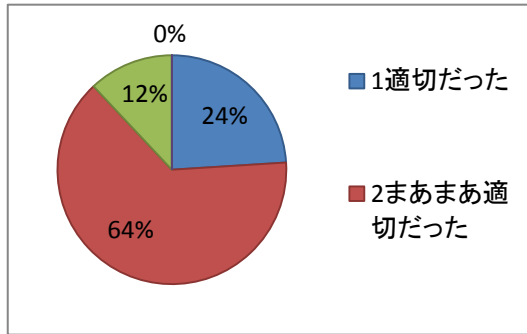


後期

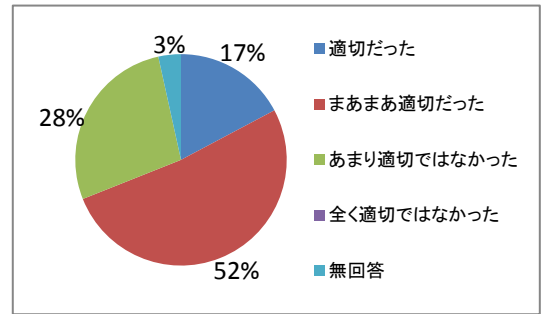
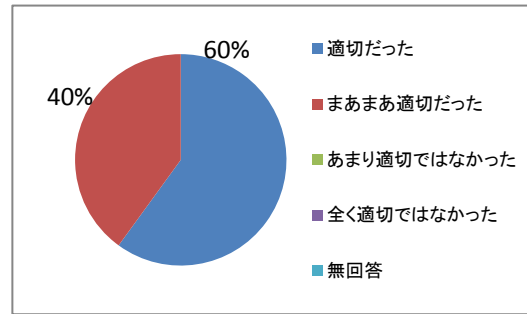
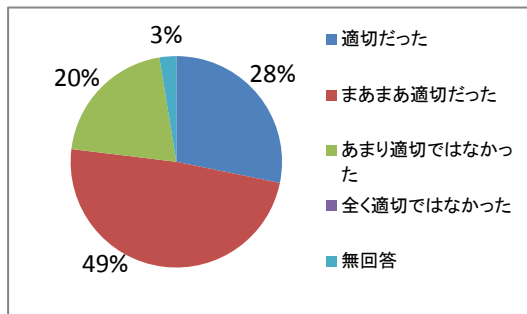


Q9. 教員から院生への連絡は、適切でしたか。

前期

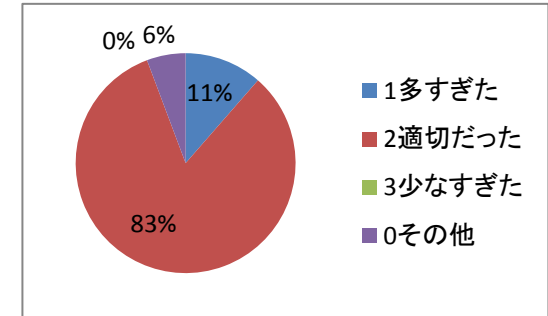
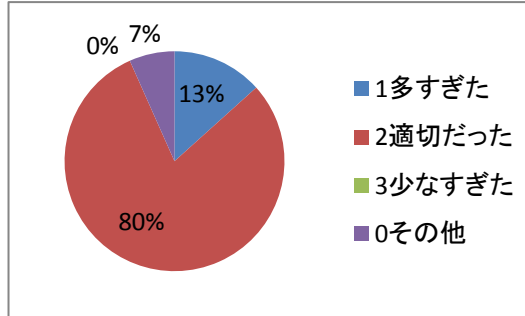
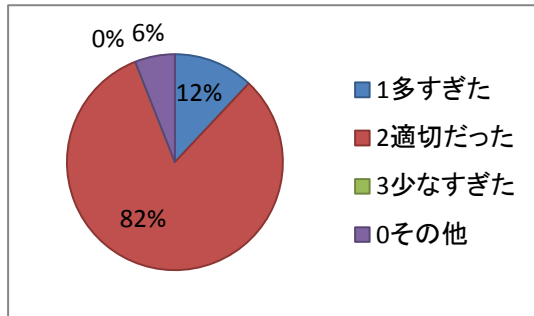


後期

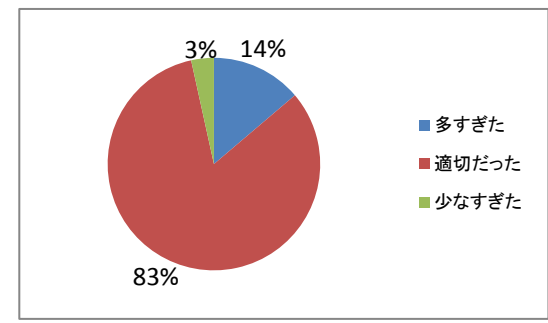
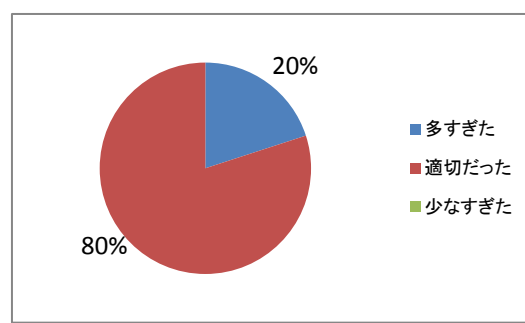
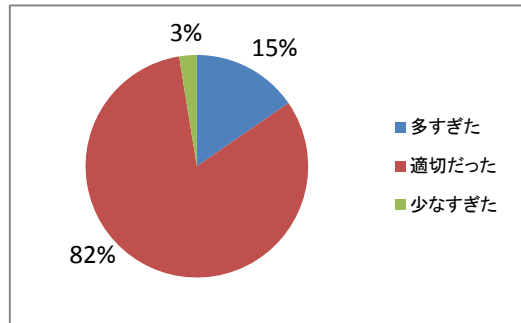


Q10. 授業の受講人数は適切でしたか。

前期



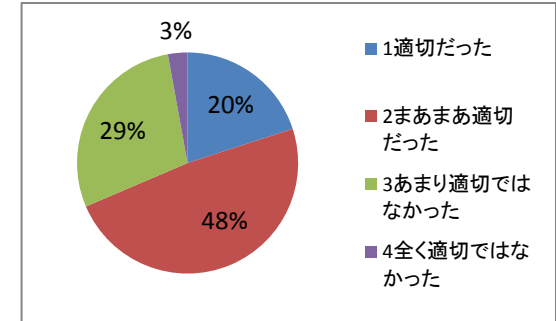
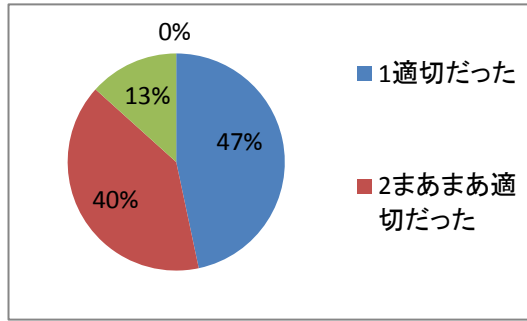
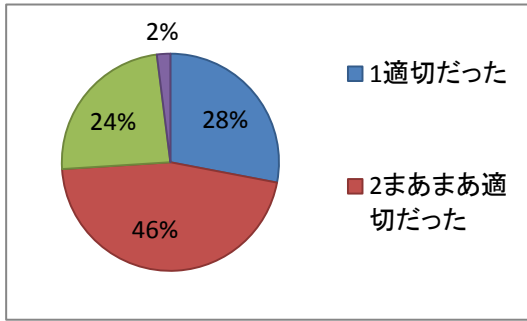
後期



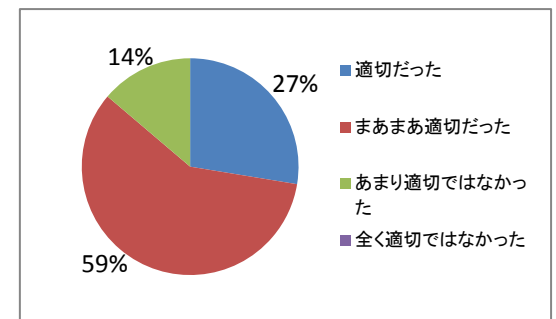
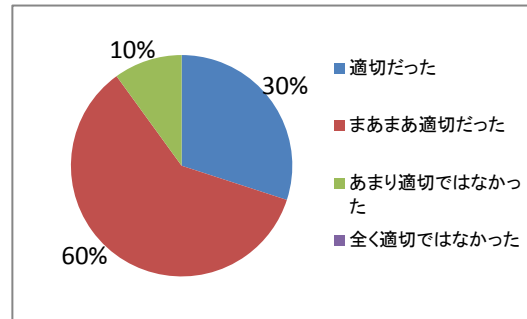
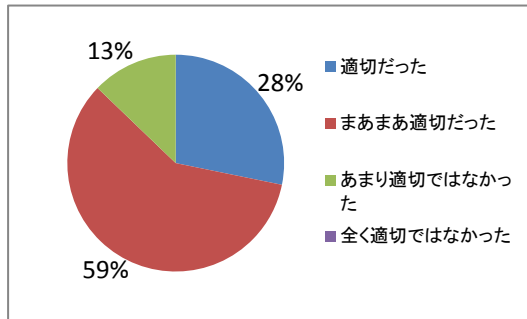
Q11. 施設・設備は適切でしたか。

Q11-1. 教室の設備について

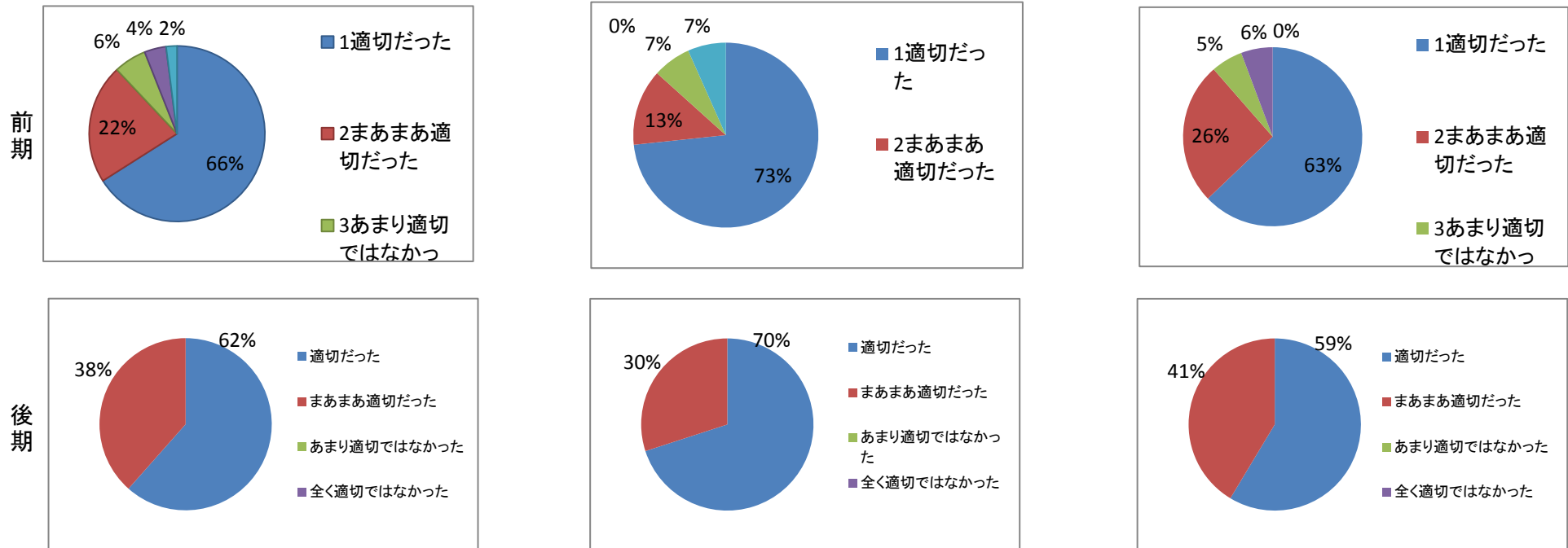
前期



後期

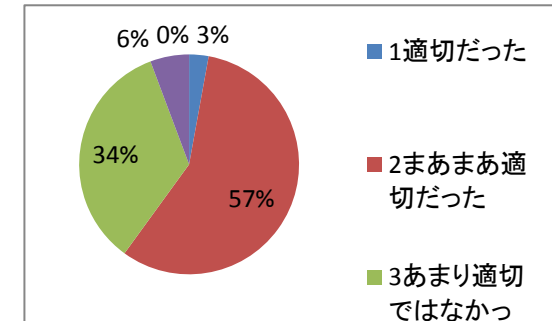
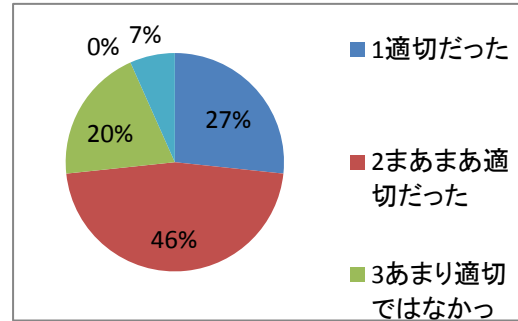
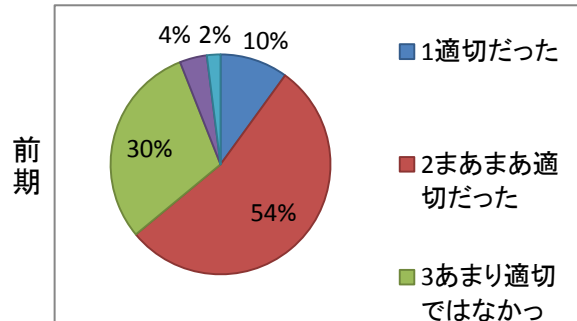


Q11-2. 院生室の設備について

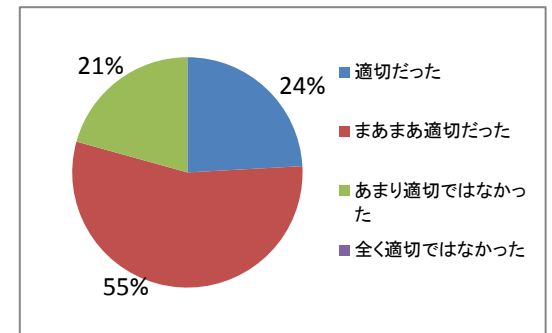
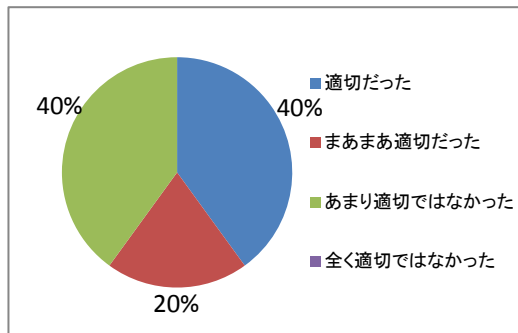
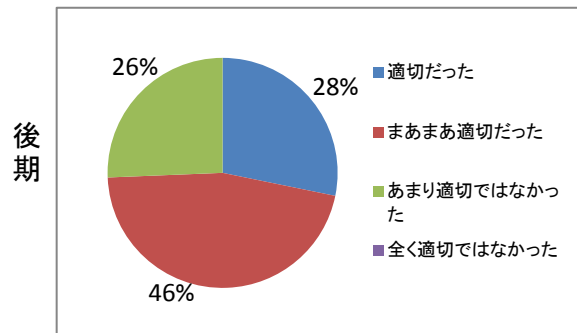


前期は「あまり適切ではなかった」「全く適切ではなかった」等の回答が1割程度ありましたが、後期は否定的な意見がなくなりました。院生室に冷蔵庫・電子レンジ等を備えることができたことが、その理由として考えられます。

Q11-3. 大学の設備について

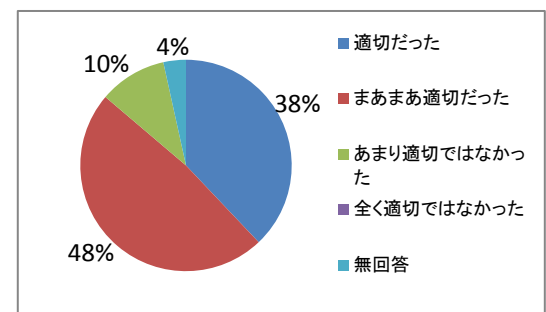
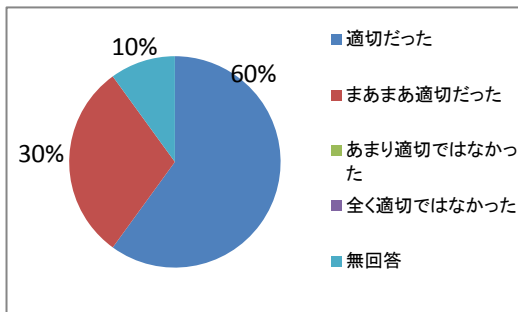
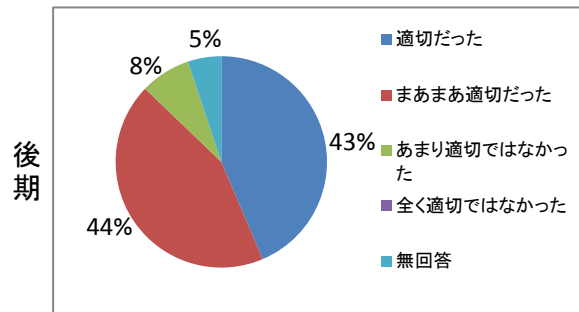
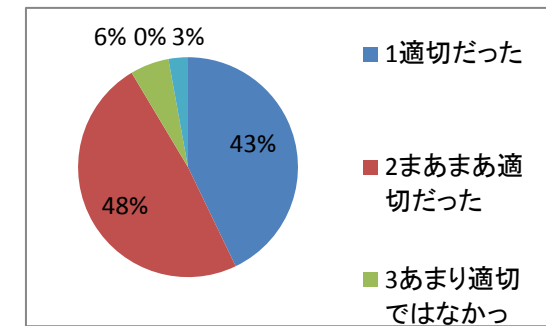
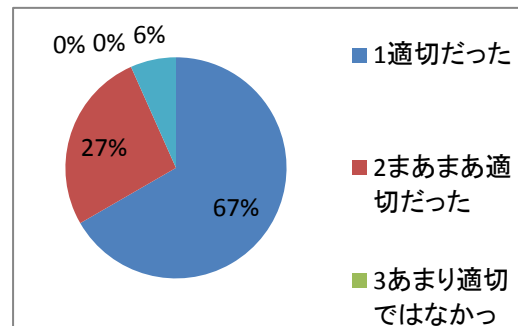
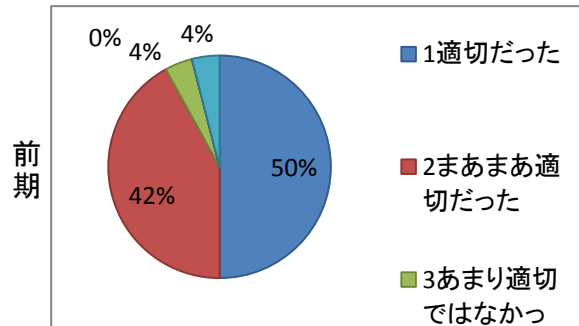


連絡体制、履修指導、受講人数等、特に大きな問題はないと思われます。ただ、院生の声としてコピーや自動販売機の設置、学食の営業時間の延長等、設備面に関する要望があがっているので、その点で改善が望まれます。

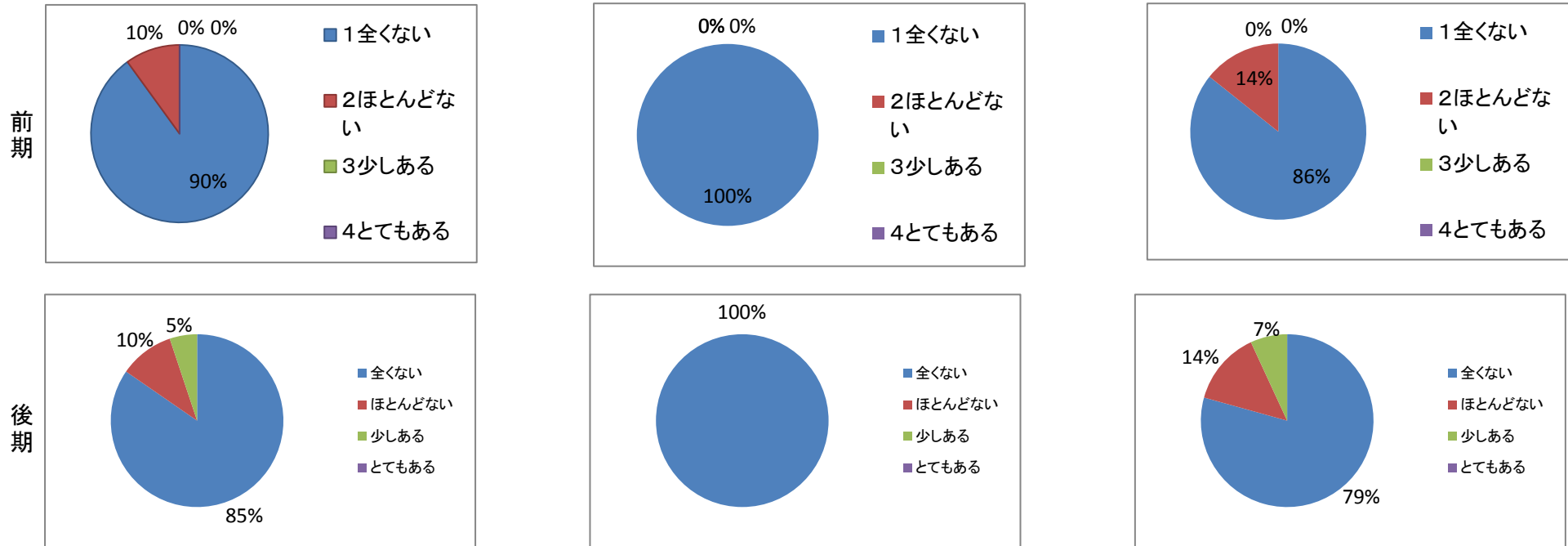


「適切だった」「まあまあ適切だった」が、前期64%から後期74%へと増えています。コピー機を備える等、大学院側が改善している姿勢を評価していることによるものと思われます。

Q12.教員の授業外での対応は、適切でしたか。

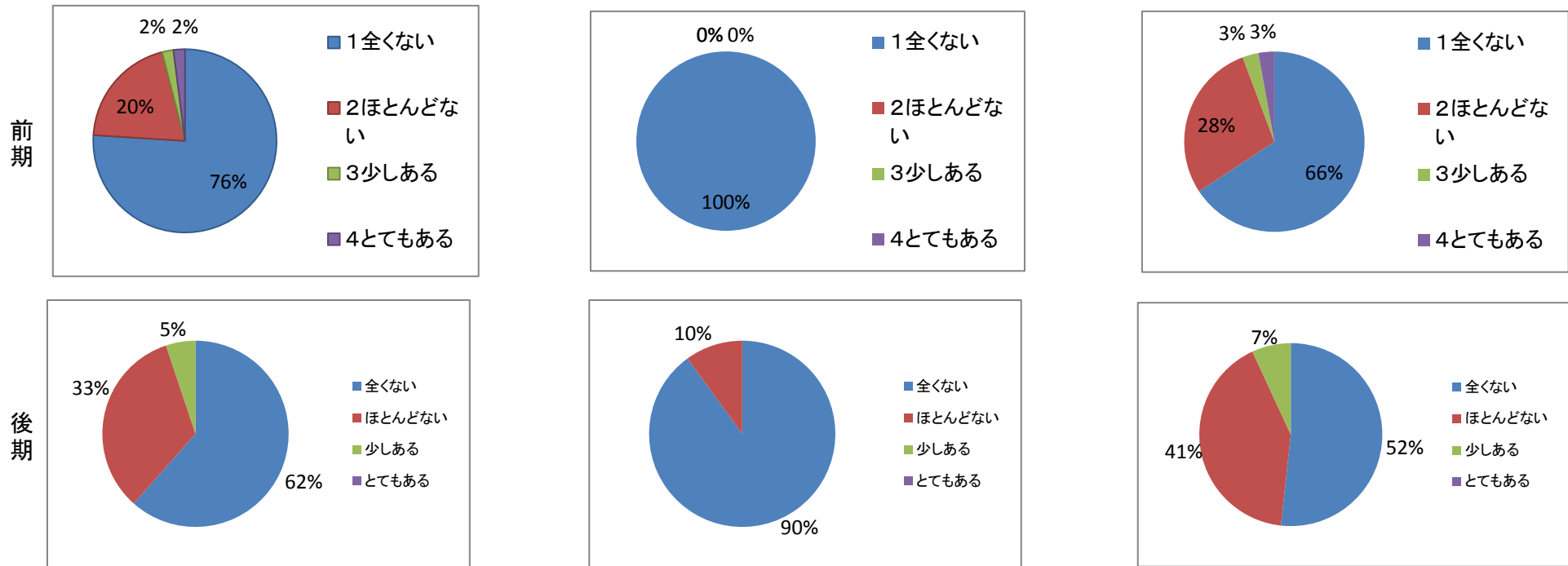


Q13. 授業中あるいは授業外で、教員にセクハラ(性的嫌がらせ)を受けたと感じることはありましたか。

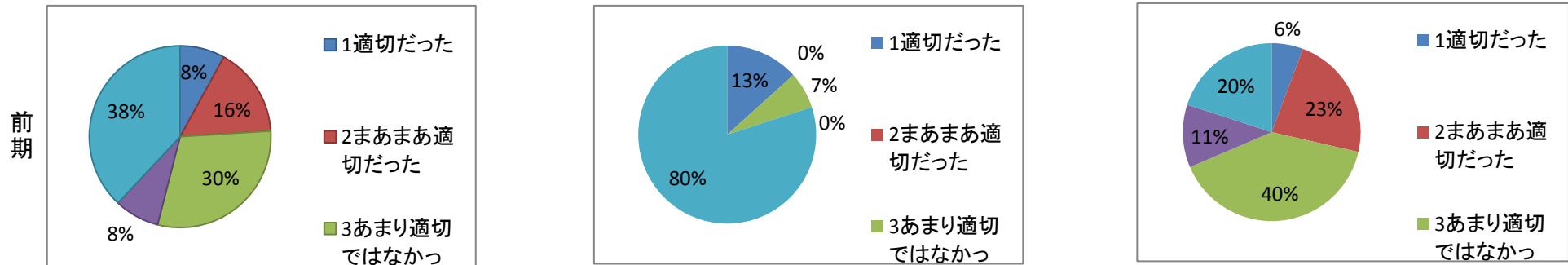


「少しある」ということなので、教員の発言のどこかにそう感じたか、あるいは視線を感じたか等が考えられますが、はっきりとした理由はわかりません。

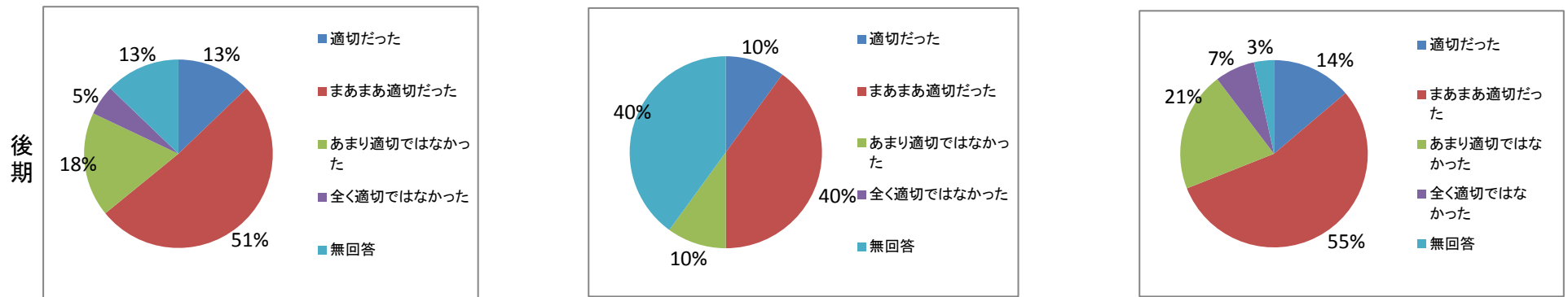
Q14. 授業中あるいは授業外で、教員にアカハラ(教員がその権力を濫用して学生に対して行う嫌がらせ)を受けたと感じることはありましたか。



Q15. 京都教育大学大学院連合教職実践研究科の就職支援体制は適切でしたか。

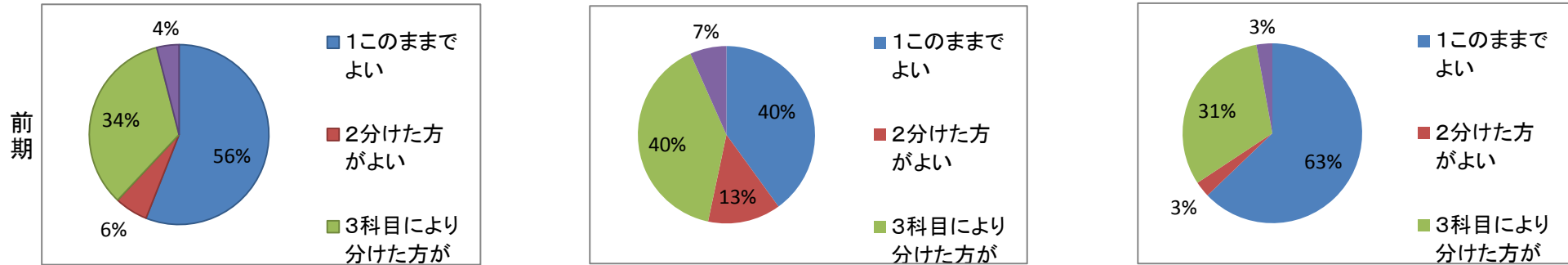


就職支援体制については、当然ですがすでに職に就いている現職とストレートマスターでは回答に大きく差があります。ストレートマスターの50%以上が「適切でなかった」あるいは「全く適切ではなかった」と不満を表しています。後期へ向けてあるいは次年度へ向けて、早急にどのような対策が必要であり、どのような対策が実行可能であるのか議論する必要があります。

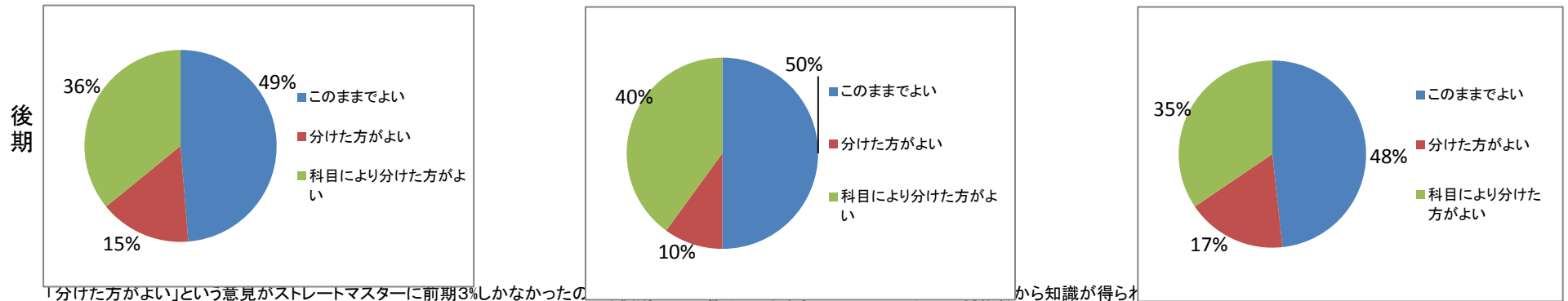


「適切だった」「まあまあ適切だった」が、前期の24%から後期64%に大幅に改善されています。前期のアンケートを受けて、すぐに実務家の教員を中心に対応し、できることから就職支援対策をとったことが評価されたと思われます。

Q16. 京都教育大学大学院連合教職実践研究科では、現職とストレートマスターが一緒になるように授業が組まれていますが、この点いかがですか。

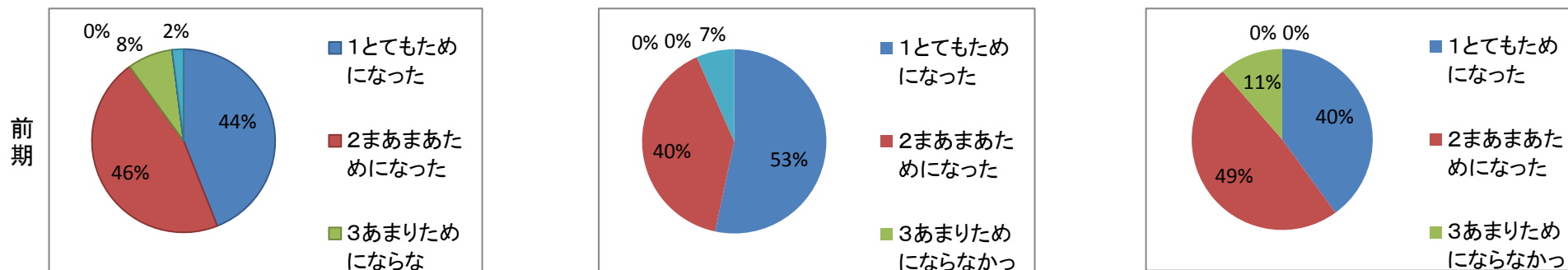


現職とストレートマスターの混合の授業については、「このままでよい」に次ぎ、「科目により分けた方がよい」と回答した者が多くなっています。ただストレートマスターより現職が「このままでよい」より「科目により分けた方がよい」と答えているところから、現職はストレートマスターと一緒に受講することで刺激も受けられると考えていますが、一方で科目によってもう少し高度なことを学びたいなど何らかの要望があることが窺い知れる回答となっています。

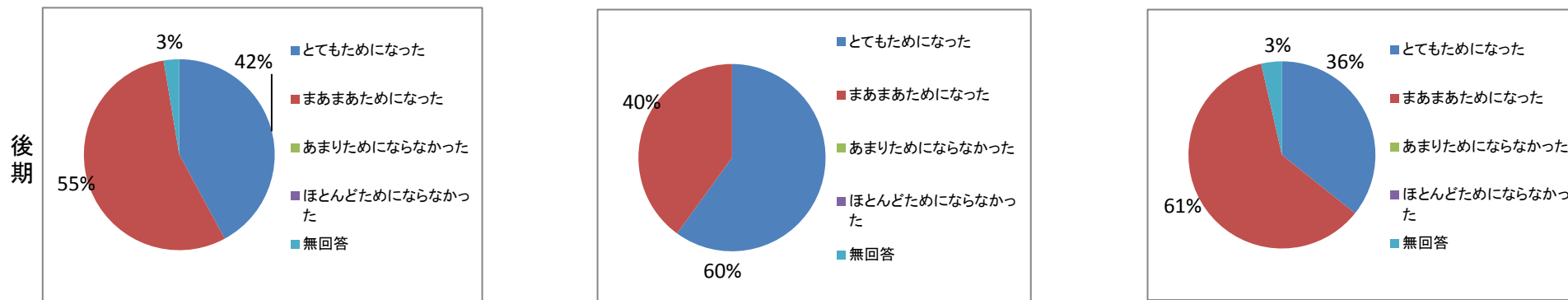


「分けた方がよい」という意見がストレートマスターに前期3%しかなかったのから知識が得られ
 がある、あるいは現職者に遠慮して思ったことが言えない、等の点でやや不満を感じているようです。

Q17. 京都教育大学大学院連合教職実践研究科で学んだことは、自分のためになったと思いますか。

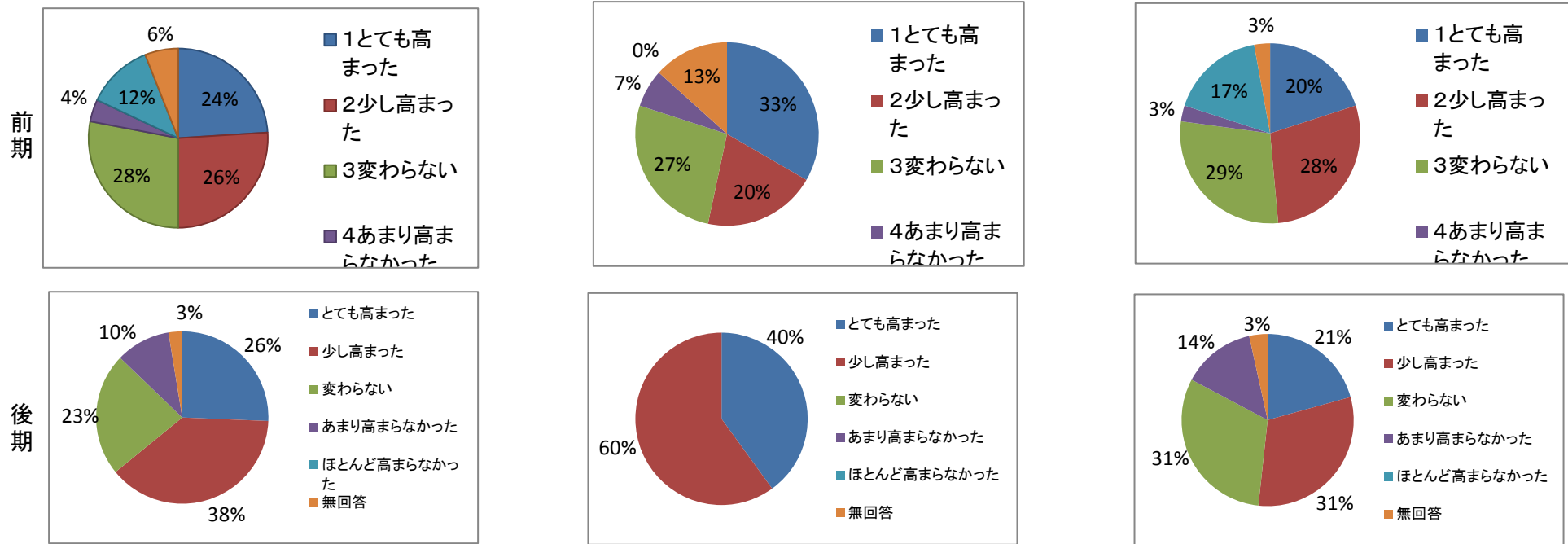


教職大学院で学んだことは約9割の院生がためになったと回答しています。いくつかの改善すべき点がありますが、総合的に教職大学院で成長していることが各自で自覚できているものと思われます。



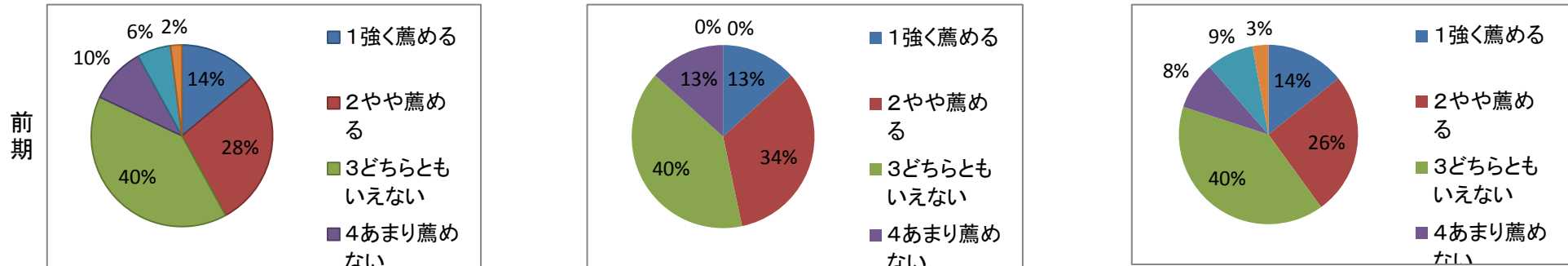
前期にはやや否定的な回答(ストレートマスターで1割ほど)がありましたが、後期はほぼ肯定的な回答へと変わっています。1年という時間をかけて教職大学院の学びが有益であったと実感してくれたものと判断します。

Q18. 京都教育大学大学院連合教職実践研究科で学んで、ますます教員になりたい、または教員を続けたいと思う気持ちが高まりましたか。

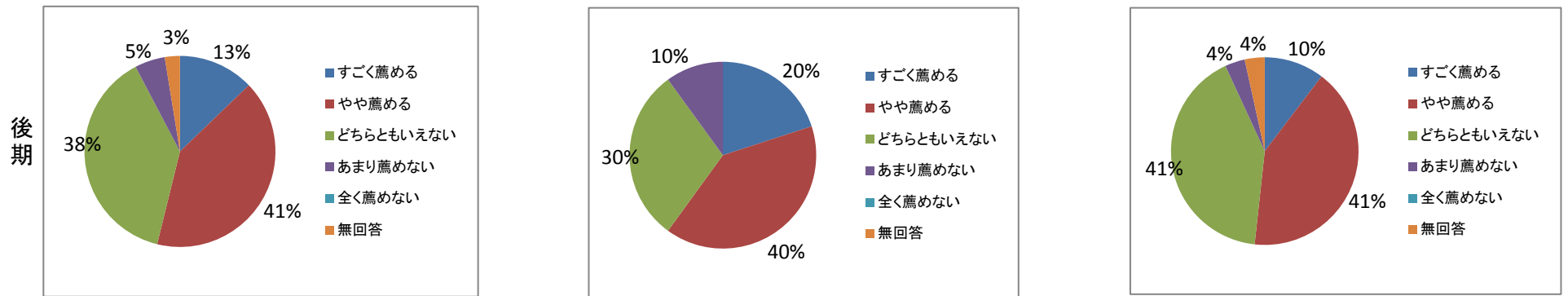


全体的には「とても高まった」「少し高まった」が、前期50%から後期64%まで向上し、評価できるといえます。ストレートマスターと現職者に分けて見ると、1年余りの在学期間を残しているストレートマスターについて変化が見られず、1年履修8名を含む現職者については全員が肯定的評価をしている点が特徴的です。

Q19. 知り合い(後輩や職場の同僚等)から、京都教育大学大学院連合教職実践研究科への入学について聞かれたら薦めますか。



教職大学院への入学を他の人へ勧めるかについては、勧める者が半分に留まっており、特にストレートマスターに関して少ないといえます。自分は教職大学院で成長できていると自覚できているにもかかわらず、人に勧められない原因は一体どこにあるのかについては詳細に見極める必要があるでしょう。



「強く薦める」「やや薦める」が、前期42%から後期54%まで向上し、現職者・ストレートマスターのいずれについても教職大学院での学びを評価していると判断できます。

Q4. よかった科目を共通科目，コース必修科目，選択科目についてそれぞれ一つずつ挙げ、その理由を書いてください。反対に強く改善を望む科目があれば最後の自由記述欄に書いてください。(後期のみ)

<よかった科目として挙げられた理由>

- ・授業内容や授業の組み立てがよかった。
- ・授業内容は難しいが、ためになる。
- ・教員の熱心さが伝わってきた。
- ・普段は行けないようなフィールドワーク先に行けてよかった。

<改善を望む科目として挙げられた理由>

- ・授業内容が似た科目があるので、それぞれ少し特色化してほしい。